

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

最近のローティーン以下の子供たちは、あれほど教師が「個性」「自立」「自主性」を金科玉条のように主張しているにもかかわらず、目立つことを嫌う傾向が強いそうである。彼らの間では、「他人に配慮ができる」気配り型が人気で、「場の空気が読めない」外し型が不人気だそうである。事実、うちの小学生の娘を見ていると、目立たないことの重要性を学習していると感じている。

「けっこうです」という言葉は頭が痛い。高文脈言語である日本語を象徴する言葉である。文脈を理解していないと、「イエス」か「ノー」かわからないのである。日本人でも文脈が微妙で、どちらかわからないことさえある。最近の若者の間で、この「けっこうです」に代わる言葉のひとつに、「ビミョー」があろう。明確な判断を避けているとの批判もあるが、若者たちの間では、共有している文脈のなかで、最近はとくに否定的な意見や感想をできるだけ述べたくないのです、推し量れという高文脈言葉として使われている。まさに微妙なのである。

しかし、われわれの世代がこうした言葉に違和感を覚えるのも事実であり、世代間の文脈共通性は薄れてきているのだろう。

つまり、われわれから見れば、他者配慮に欠け社会の和を乱す存在であるが、他方、若者社会のなかでは、依然として相互配慮的であり、文脈感度も高いという一見相反する現象が起きている。

この現象が意味するものは、若年層は従来の常識レベルでは帰属集団の領域設定を行っていないということである。日本の若者たちは、地域共同体を失い、大家族を失い、家族さえも解体の危機に瀕する^{ひん}いっぽうで、欧米のような低文脈社会のなかで相互独立的自己を確立することもなく、依然として、高文脈社会のなかで相互協調的自己をもちつづけている。彼らが帰属集団の再設定を試みることは、自然の成り行きではないだろうか。彼らを非難することは容易だが、努力をせずとも、彼らと文脈や倫理観を共有できると思っていたわれわれの世代の怠慢と思うべきではないか。このような仲間言葉への回帰と、大組織を敬遠する若者の傾向を考えると、日本は明らかに、昔のような小規模帰属集団をなす方向に向かつてはいないだろうか。

（引用先 小笠原泰『なんとなく、日本人』
2007年 早稲田大学）

問 傍線部①「高文脈言語」とはどういうことか。
最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選べ。

ア 文脈から高レベルに孤立した言語

イ 所属する小集団が意味を決める言語

ウ その場の状況から微妙にはずれた言語

エ 状況によって意味が逆に変化する言語

オ その場の空気によって意味が左右されやすい言語